

戦前の稲佐に思いを寄せて

太田 靖彦



「稲佐岳登山道路入口」石柱

江戸時代からの本通りと、明治になって出来た色町とが交差する、今のバス通りに立っている。今はない色町は、稲佐岳登山道路入口の石柱のある場所を中心に拡がっており、今も、町内のあちこちに、当時の遊郭の建物

が点在している。今は昔、家庭の事情で借財を背負い、女性としての人権も無視され、苦しみに堪え、生きぬいた怨念の場所である。また、この怨念の色町を、華町と表現するむきもあるが、言語道断である。ちなみに、この色町の制

に振舞い、芋洗い、母はにこにこして、「どうねー」と聞くと、誰れも返事はしない。やがて、風呂からあがると、「おばちゃんありがとう」と言っ

て帰っていく。隣の奥さんからは、別段お礼の言葉もない。母もお礼を期待している感じはない。ここが、稲佐らしい所で、後刻、「うちの

関係のない世間話を始める。その言葉のやり取り、間の取り方が、阿吽の呼吸で、すべてを飲みこんでいる感じ、「お互様よ」「うちの子供もよろしくねー」と言う、実に大らかで、みんなで子供の世話をしている感じである。

また、こんなこともよく見かけた。隣の奥さんが、夕食時ご飯が少し足りない、夏は小さなしょうけを持つて来て、「少しご飯ばかりとつてー」と言っ

て、「お飯を借りに来る。冬は小さな一人用のおひつ持参である。母も時々借りていたようであった。借りに来ると「よかよ、持っ

度は、昭和三十二年四月一日になくなったが、建物と言葉は、今も残っており、一日も早く忘却の彼方へ捨てさりたいものである。話は前後するが、この色町の発生を調べてみると、万延元年九月（一八六〇年九月）

話を戻して、私の目に写った、戦前の町の人の様子を考えてみると、船員さんが多かった様に思う。遠く東支那海で働く、以西底曳引網のトロール船の船員さん、三菱造船所に通う工員さん、次に、三菱の下受け工場の工員さんと、それに、一般の会社の人など、俗にいう、サラリーマンの所帯が、多かったように思う。また、よく耳にすることで、昔から稲佐という町と、遊郭のある町とか、色町とか、いう人が多かったが、私は、不満である。町に住んでいると、そんな感じはまったくなく、大変な町である。色町というのは、町の中の特別な区域に、存在していただけのことであって、町の人は、人情味豊かで、格式ばらず、大

らから、つましく、それでいて、どことなく、稲佐人気質の筋の通ったところが、貧富の差があまりなく、近所同志が、良く助け合っている町であつたと思う。例えば、俗に言う、「貰い風呂」は、近所同志の関係をよく表していると思う。戦前、風呂は風呂屋でというのが一般的で、風呂を持つている家庭は、少なかった。私の家にも風呂はなく、夏の間だけ、家の裏の洗濯場の土間に、桧の風呂を据え、入浴をしていた。母は風呂が沸くと、いつも隣の子供に、「〇〇ちゃん風呂沸いたよ、はいるねー」と、垣根ごしに声をかける。隣の子供から「おばちゃんはいるー」という返事がくる。すると、間をおかず母が、「一緒にはいつてー」という、仕方なく風呂にはいる用意をしていると、時々であるが、隣の子供は手ぶらでくる時があつた。そんな時、母は「てんげ（手拭い）はあそこ」と、指さしていたことを思い出す。タオルを取って、一緒はいると隣の子供は、我が家同然

風信

〇三月。平成二十八年一、二月お休みしておりました長崎歴史文化協会の各講座を左記の通り再開致しましたので御自由に御参加下さい。（会費不要、資料代各自）

- 一、長崎学を学ぶ講座 毎週月曜日午前十時半より。講師・毎回不同（資料代二〇〇円）
- 一、古文書を読む会 毎月第一・第三火曜日の二回、午前十時半より正午（指導 川原清・米田輝臣・久保美洋子）（後見、越中）
- 一、水曜懇話会 毎週水曜日午後一時半より三時。（竹之下・江口・吉田・野口・末永（女）の各氏を中心に）
- 一、食の文化を考えるサークル 毎月第二・第四金曜日午後二時より三時（脇山壽子、太田靖彦・大東良平各氏を中心に。）

〇先日、「昼休みに自由に話の出来る場所があつたら」と言うお声があり、当協会事務所を「昼休みの集いの場」として開放する事にしました。毎週月・水・金曜日十二時頃より午後二時頃まで。（昼食は各自持参）御自由に御参加下さい。〇県九條の会各支部長会、二月二十日（日）新年度初連絡会開催、本年度行事予定・会計報告等あり。五月四日（祝）には「第十回・親子で歩く 憲法さるく」の企画発表あり。今年には旧長崎六街道のうち北街道（神功皇后ゆかりの鎮懐石・原爆被爆の片足鳥居と大楠）を中心に散策するので多数ご参加下さいとの事。

〇次に三月と言えば三日の「おひな祭」と「お彼岸」がある。江戸時代の長崎の「ヒナ祭」については古賀先生はオランダ商館のF. Meijianの『Japan』にある「Het Poppentest」を読まれるとよいと記しておられるし、シーボルトの長崎年中絵の中にも長崎の家庭ひなまつり風景が描かれている。そして四日は裏節句とも言い「前日とほぼ同一なり」と記してある。戦前は初節句の家に見物に姉達は出かけていた思い出がある。

〇今月ご寄贈いただいた書籍
西日本文化協会より『西日本文化No.四七七』東アジアの中世交易と博多湾・有明海の輝き』等の記載あり（七〇〇円）
世界文化社より『家庭画報3―2016』国宝を観る』日本の誇るべき文化国宝のさまざま、其の第一九州の国宝建造物として檀ふみ女史は長崎大浦天主堂・唐寺崇福寺を訪ねられている。（一、三〇〇円）

（長崎歴史文化協会相談役）

長崎歴史文化協会研究室

TEL 八二二一―一五四〇
十八銀行公会堂前出張所二F

